慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	補文標識「という」に関する一考察
Sub Title	
Author	大場, 美穂子(Oba, Mihoko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2016
Jtitle	日本語と日本語教育 No.44 (2016. 3) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20160300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』44：1–19（2016.3）

補文標識「という」に関する一考察

大　場　美穂子

1.　はじめに

この論文では、補文標識[1)]「という」の先行研究について検討する。

補文標識「という」を考察するということは、連体修飾の構造を考察するということに他ならない。この問題を扱うためには、多くの調査と考察が必要になるが、本論文では、その初めの作業として、先行研究を検討し、これからの考察の方向性を考えることとしたい。

補文標識「という」についての先行研究はいろいろあるが、ここでは、寺村秀夫（1975–1978）、戸村佳代（1990–1992）、大島資生（1989, 1991）を取り上げることとする。

2.　連体修飾構造の種類

考察に当たって、まず、用語と例文の表記を以下のように定める。

（1）　私が駅で見かけた<u>女性</u>は、赤い帽子にピンクのマフラーを身につけていた。

この例では、「女性」という名詞に連体修飾部「私が駅で見かけた」がつくという構造になっている。このとき、修飾部を伴う「女性」という名詞を、（寺村秀夫（1975–1978）に倣って）修飾部に対して「底の名詞」と呼ぶことにする。また、本稿で例を提示する際には、考察対象である連体修飾の底の名詞にのみ下線を付すこととする。

以下ではまず、「という」の考察に当たって必要な連体修飾の分類についてまとめる。

2-1 「内容補充」の連体修飾

「という」について考察するためには、修飾部と底の名詞の関係をまず「内の関係」と「外の関係」の2種に大きく分けておくことが必要である。

(2) さんまを焼く男(「内の関係」)
(3) さんまを焼く匂い(「外の関係」)

連体修飾構造を内の関係と外の関係に分類したのは寺村秀夫(1975-1978)[2)]である。「内の関係」というのは、修飾部と底の名詞とが格関係を有する形で結びつくような連体修飾のことであり、「外の関係」というのは、修飾部と底の名詞との間に格関係が認められない場合を指す。両者の連体修飾の意味的な違いについて、寺村(1975-1978)は以下のように述べている。

> 「これを、一般的には次のように言うことができるだろう。「外の関係」においては、修飾部は底の名詞の内容を表わす、または少なくともその内容に関わるものであるのに対し、「内の関係」では、修飾部は底の名詞を「特定」するには違いないけれども、その内容には関わらない、と。つまり、構文的に「内の関係」で結びついている連体修飾構造にあっては、意味的には、修飾部は底の名詞を「付加的」に修飾しているに過ぎないが、「外の関係」にあっては、それは底の名詞を「内容補充的」に修飾している、ということになる。」(寺村1993: 197)

つまり、内の関係においては、修飾部が底の名詞の内容に関わることがないのに対して、外の関係の連体修飾構造では修飾部は底の名詞の具体的な内容を述べるというように、これら2つの連体修飾には、構造的な違いとともに意味的にも違いが存在する。

この2種の連体修飾関係のうち「という」がかかわるのは、外の関係の場合に限られる。なぜなら、「という」という形式が導く補文は、底の名詞の内容を述べる節であると考えられるからである。例えば、

(4) 当該の文を日本語に訳せという指示

この例において、「当該の文を日本語に訳せ」という修飾部は、底の名詞「指示」の具体的内容を述べている。つまり、「という」という形式は名詞

とその内容とをつなぐ働きをしているのである。

以上、「という」を考察するに当たっては、ひとまず外の関係の連体修飾だけを扱えばよく、それは、外の関係の連体修飾構造においてのみ修飾部が「内容補充」の機能の担うからであるということを述べた。

2-2　内容補充の連体修飾と「という」の有無

内容補充の修飾部があればいつでも「という」が現れるというわけではない。

(5)　どんなにひどい雪でも彼が助けに来るという意見
(6)　ひどい雪の中を苦労して彼がやってきた（という）話
(7)　ひどい雪の中を苦労してやって来る彼の姿

上記の例はどれも内容補充の連体修飾であるが、(5) では「という」を省くことができず、(6) では「という」はあってもなくても許され、(7) では「という」を修飾部の後に挿入することは不可能である。

このように、内容補充の連体修飾部の中には、①必ず「という」を伴う場合、②「という」があってもなくてもよい場合、③「という」の挿入が許されない場合の 3 種が存在する。そのため、寺村（1975-1978）も含め多くの先行研究が、①②③のそれぞれの条件の記述を行ってきた。

3.　先行研究の検討

まず初めに、寺村（1975-1978）を見ていくことにしよう。

3-1　寺村秀夫（1975-1978）

寺村（1975-1978）は、先にも述べた通り、連体修飾全体を考察したものであり、その扱う範囲は広範に渡る。そのため、本稿のテーマである「という」の使用条件の考察という観点から見ると、記述がやや分かりにくい。そこで、本稿では、「という」の使用条件を整理するという観点から寺村

（1975−1978）を再構成することを試みる。

この論文は、まず、連体修飾構造を内の関係と外の関係に分類するということから始まるので、「という」の検討より前に、どのような名詞が「外の関係」の修飾部を持つことができるか（つまり、内容補充の連体修飾部を持つことができるか）を記述している。外の関係の修飾部（＝内容補充の連体修飾部）を取れる名詞は、寺村（1975−1978）によれば次のようなものである。

1. 発話・思考の名詞：「言葉」「噂」「思い」「期待」など
2. 「コト」を表す名詞：「事実」「運命」「癖」「方法」など
3. 感覚の名詞：「姿」「音」「絵」「光景」など
4. 「相対性」の名詞：「上」「翌日」「理由」「結果」など

これらの名詞が底の名詞となって、外の関係の修飾部は、底の名詞の内容を補充するという役割を持つわけであるが、その内容を補充する際に、「という」という形式が連体修飾部と底の名詞との間に存在できるかどうかは、先にも述べた通り、①必ず「という」が介在する場合、②「という」があってもなくてもよい場合、③「という」の挿入が不可能な場合の 3 つがあることが指摘されている。

3−1−1 「という」の介在可否にかかわる要因

寺村（1975−1978）は、上記 3 つの場合の条件についての考察に当たって次のような観点を導入している。

> 「「‥‥ト」は、元来、文（あるいはその一部）をできるだけそのまま（つまり陳述度、モダリティをできるだけ保持しつつ）、他の文の中に引き入れるときに使われる形式である。「トイウ」の「ト」にも、当然その機能は引きつがれていると考えられる。とすると、「トイウ」は、底の名詞にその内容を（文の形で）あらわす修飾部の中の陳述度＝モダリティが高ければ高いほど必要であり、それが低くなる、渡辺文法流にいえば「陳述内容」、フィルモア流にいえば‘proposition’を表わすだけなら、それは不要、または邪魔になる、というふうに考えられる。」（寺村 1993：267）

「修飾部がどういう形で終わるか、あるいはそれが提題の「ハ」を含むかどうか、といったことは、たしかに「トイウ」の介在可否についての大きな条件ではあるが、しかし十全な決め手ではない。」（寺村 1993：268）

「「トイウ」が介入可か否か、可の場合それが必要か任意か、というのは、その前に来る修飾部の内部構造だけから言えることでもなく、またその後に来る底の名詞の種類だけから言える（つまり辞書にある特性表記をしておくことで処理できる）ことでもない。両方が、いわば相関的に「トイウ」の用法を条件づけているのである。」（寺村 1993：268）

上記一つ目の引用は、以下のような例にかかわる。

（8）　私は、何としてもアメリカへ留学する（という）決心を固めた。
（9）　私は、何としてもアメリカへ留学しようという決心を固めた。

上記の 2 つの例はともに底の名詞は「決心」で同じであるが、（8）では「という」の使用が任意であるのに対して、（9）には「という」が必須である。この違いは、修飾部の最後の「留学する」と「留学しよう」との形式の違いに由来する。寺村（1975–1978）の指摘に従えば、（8）の「留学する」という形式は陳述度が低く、それゆえ「という」の介在が任意となるが、（9）の「留学しよう」という形式は「留学する」より陳述度が高く、それゆえ「という」の介在が必要となる。

第二および第三の引用は、以下のような例とかかわる。

（10）　彼は、この子が大きくなったらえらくなるだろうという意見を述べた。
（11）　彼は、この子が大きくなったらえらくなるという意見を述べた。
（12）　* 彼は、この子は大きくなったらえらくなる意見を述べた。
（13）　私は、この子は大きくなったらえらくなるだろうという気がする。
（14）　私は、この子は大きくなったらえらくなる（という）気がする。

これまでの考察に従えば、まず、「気」という名詞が底の名詞になっている（13）と（14）の比較では、「えらくなるだろう」より「えらくなる」の方が陳述度が低く、それゆえ（14）の場合には「という」の介在が任意になるという説明が可能である。これらの例は、修飾部の陳述度の違いで「という」の介在の可否を説明しうる。

しかし、「意見」という名詞が底の名詞になっている（10）から（12）の例を見ると、修飾部の述語の陳述度が低くても、必ず「という」の介在が必要になっている。「意見」が底の名詞の場合には、「という」を省いた修飾部は許されない。つまり、（12）のような例が許されないのは、修飾部の陳述度の問題ではなく、底の名詞が「意見」であることに由来すると予想される。

つまり、寺村（1975–1978）は、「という」の介在の可否を決める要因を2つに分けて考察している。一つは、修飾部の陳述度の高さという要因であり、もう一つは、底の名詞の意味的種類という要因である。

3–1–2　連体修飾部の陳述度

先に例（8）（9）や（13）（14）で述べた通り、寺村（1975–1978）は、陳述度の違いが「という」介在の可否にかかわっていることを指摘する。陳述度の形態的なスケールとして、以下のような図が示されている。

（低）				（高）
1→	2→	3→	4→	5
動詞現在形	～ラシイ	～ダ	丁ねい体	終助詞
動詞過去形	～ダロウ	～ノダ		
形容詞現在	～カモシレナイ	～ハズダ		
形容詞過去	意向形	命令形		
～ダッタ	推量形			

（寺村 1993：269）

つまり、ここでは、修飾部の末尾の外形的な特徴が「という」の介在の要因となっているということが指摘されている。

3–1–3　底の名詞の種類と「という」の有無

外の関係の連体修飾部を取れる名詞は限られていると先に述べたが、寺村（1975–1978）はこれらの名詞を分類し、それぞれのグループと「という」の使用の関係を、おおよそ以下のように述べている。

(1)　発話の名詞：修飾部を取る場合は「という」が必須である。
(2)　思考・思念の名詞：陳述度の低い修飾部を取る場合は、「という」が現れないことがある。
(3)　コトを表わす名詞：陳述度の低い修飾部を取る場合は、「という」が任意の場合が多い。
(4)　感覚の名詞：「という」を用いることができない。
(5)　「相対性」の名詞：「という」を用いることができない。

つまりここでは、底の名詞の種類が「という」の介在の要因になっていることが指摘されている。

3-1-4　その他の指摘

寺村（1975-1978）の主張は、先に述べた通り、修飾部の陳述度と、底の名詞の種類という 2 つの要因によって「という」を用いるかどうかが決まるというものだが、その他に、以下のような記述が見られる。

上にまとめたように「コトを表わす名詞」は通常、「という」があってもなくてもよいということになっている。しかし、下記の引用は、それに加えて、底の名詞が主節においてどのような位置に立つかによって、「という」が現れやすい環境と現れにくい環境とがあるということを示唆している。

> 「「事実」が上のように使われる例【引用者注：修飾部が「という」を伴わずに現れる例】は非常に多いが、手もとに集まった例を見ると、それに「アル／ナイ」「～ダ」がつづいて文が終わっているのが圧倒的に多い。そうでなく一般の名詞と同じように、いろいろな助詞がついて後の用言にかかっていくことはもちろん可能であるが、どういうわけか、そのときは「トイウ」が入っている例がよく見られる。しかし、これはまだどれ位一般的な傾向かいえる段階ではない。」（寺村 1993：276）

以下の例を参照されたい。

(15)　サターン・ロケットについても、先週サクラメントでの実験中に爆発した事実がある。（寺村 1993：276）
(16)　同時に彼のこころに、いまの自分を慰める者が、アメリカ人の戦友でなく、沖縄人の一家族であるという事実が悲しいものに思われた。（寺村 1993：277）

上記の引用をこの例に沿って言えば次のようになる。例(15) のように底の名詞を含む主節が「…事実がある。」という形式である場合には「という」が用いられない場合が多く、例 (16) のように、主節内で「事実」という名詞が格助詞を伴って他の用言にかかっていく場合には、「という」が用いられる場合が多い。つまり、底の名詞が同じく「事実」であっても、その底の名詞が主節でどのような文脈に置かれるかによって意味的に影響を受けて、「という」介在の可否が変わってくる可能性があるということであり、上記の場合で言えば、(15) のような場合には「という」は介在することが少なく、(16) のような場合には「という」が介在する場合が多くなる。

寺村自身、「どれ位一般的な傾向かいえる段階ではない」と述べているが、しかしここでは、修飾部の陳述度や底の名詞の種類の他にも「という」の介在の可否を決める要因が存在する可能性が示唆されていると言ってよい。

3-1-5　寺村 (1975-1978) から見えること

以上、寺村 (1975-1978) の指摘を見たが、ここでは次のような点が主張されている。

①修飾部の陳述度の高さが「という」の介在の可否と関連する。
②底の名詞の種類が「という」の介在の可否と関連する。
③底の名詞が主節内でどのような位置に置かれるかで、「という」の介在の可否が変わってくる可能性がある。

①と②については、ひとまず（修飾部の用言の形式、および底の名詞の種類という）外形的な基準を立てて分類をこころみたということであろうが、③に示唆されているように、完全に外形的な基準だけでは「という」の使用条件は記述できそうにない。だから、寺村 (1975-1978) の段階ではまだ①と②をそれぞれ別々に検討するにとどまっているが、いずれは、この①～③ 3 つの間に何らかの平行性を見つけなければならないと考えるの

が自然であろうと思われる。

この平行性を探る手がかりとして、「という」という形式は引用の助詞「と」の性格を強く引き継いでいるということが寺村論文のあちこちで指摘されているが、「という」そのものがどのような意味・機能を持っているかという点については、寺村自身、まだ首尾一貫した主張があったわけではないようである。

3-2　戸村佳代（1990, 1991, 1992）

次に、戸村佳代（1990-1992）[3] を検討することにする。戸村（1990-1992）は「という」の使用条件を書き上げるのではなく、「という」がどのような機能を持つかについて検討し、「という」が介在する内容補充の連体修飾と「という」が介在しない内容補充の連体修飾の意味の違いについて考察している。

戸村（1990-1992）は、何らかの基準を設けて「という」の使用条件を網羅的に書き上げるということをしないので、「という」の全体像が見えにくいのだが、その考察に注目すべき指摘がいくつかあると思われるので、それについて見ていく。

3-2-1　「という」が「非叙述性」を持つという主張に対する批判

戸村（1991）は、まず Nakau（1973）や Josephs（1976）を検討し、彼らが主張する「「トイウ」は補文の非叙述性を示す形式である」という説を退ける。ここで言う「非叙述性」とは、すなわち「補文の内容が真であることを話者が前提としていない」ということである。

例えば、戸村（1991）から説明を引用すれば、以下の例[4] では、

（17）　昨日の新聞で田中さんが離婚した<u>こと</u>が報告された。
（18）　昨日の新聞で田中さんが離婚したという<u>こと</u>が報告された。

例（17）では補文の内容が真であるという話者の前提があるのに対し、(18) では真であるかどうかについて話者が疑いの気持ちを持っており、それが「トイウ」によって示される、と Josephs は説明する（戸村 1991：216）。

しかし、戸村（1991）は、以下のような例を挙げて、このような主張を退ける。

（19） 太郎は、次郎が嘘をついたということを知っている。

Josephs（1973）の主張に従えば、上記の例では、話者は「次郎が嘘をついた」ことが真実であるかどうかを疑っているということになるが、そのような事実はないとするのである。

3-2-2　戸村（1991）による代案

以上のことを踏まえ、戸村（1991）は代案を提示している。まず、以下の例を参照されたい。

（20） 佐藤さんがアメリカへ行った（ϕ ／ ?* という）話を聞きましたが、なかなかおもしろい話でしたよ。(戸村 1991：例（13））

（21） 佐藤さんがアメリカへ行った（*ϕ ／という）話を聞きましたが、それは本当ですか。(戸村 1991：例（14））

戸村（1991）の判断によれば、例（20）では「という」が用いられず、例（21）では逆に「という」を用いなければならない。

この理由について、戸村（1991）は次のように説明している。すなわち、「という」が介在する（21）において、「本当かどうか」が問題になっているのは「佐藤さんがアメリカに行った」という命題についてのみであるのに対して、「という」が介在しない（20）で「おもしろい」とされているのは、「佐藤さんがアメリカへ行った」ことにまつわるその他の話をも含む全体に対してである。上記 2 つの例にこのような違いが生じるのは、「という」には「修飾部に表されている行為・出来事を現実の世界から切り離して取り出す作用がある」(p. 221）からだという。このような「という」の機能を

戸村（1991）は「‘トイウ’の抽出機能」と呼んだ。

> 「「トイウ」の基本的な機能は、ここで「抽出機能」と呼んだもので、修飾部で表された事態をそれに関連する出来事・事態から完全に切り離し、時の概念から切り離す作用を担っている。その性質により、「トイウ」を伴う名詞修飾では、修飾部の認知と被修飾語の認知が同時的ではなく、両者のつながりは心理的・精神的プロセスを介した間接的なものである【下略】」（戸村 1991：229）

3-2-3　代案の検証

「という」の機能について上のように規定し、さらに戸村（1991）は、修飾部に「という」を介在させることができない以下の 2 つの場合について、その理由を「という」の抽出機能の点から説明しようとしている。

- 「外の関係」の連体修飾であっても、知覚を表わす名詞が被修飾語となっている場合には一般的には「という」を用いることができない。
- 「内の関係」の名詞修飾には「という」は用いられない。

先にまとめた寺村（1975-1978）には、これらの事実についての指摘はもちろんあるが、(a) 感覚の名詞についた外の関係の修飾部と、(b) 内の関係の修飾構造全般にはなぜ「という」が介在しないかについての説明はなされていなかった。ゆえに、戸村（1991）がこれを試みていることは大変興味深い。特に、寺村論文では、感覚の名詞を底の名詞とする連体修飾は外の関係の連体修飾とされていて、これらは内の関係の連体修飾とは全く異なるものとされているから、その共通性について論じるということが行われにくくなっている。

戸村（1991）によれば、感覚の名詞においては、修飾部の認知と底の名詞を知覚するのが同時的であると言う。また、内の関係の修飾部と底の名詞の関係も同時的、直接的であるという。例えば、以下のような例である。

（22）　雨が降っている<u>音</u>（感覚の名詞）
（23）　きのう私が買った<u>本</u>（内の関係）

例（22）の「音」を知覚する時間は「雨が降っている」時間に含まれるという関係があり、例（23）の「本」の認識は「きのう私が買った」という部分と同時的という関係があるとする。

そして、両者の「同時的、直接的」という特徴が「という」の抽出機能になじまないため、感覚の名詞の場合や内の関係の場合には、「という」は用いられないと戸村（1991）は主張する。

3-2-4　代案への疑問

先の例（20）の説明に出てきた「「佐藤さんがアメリカへ行った」ことにまつわるその他の話をも含む全体」というものが例（22）（23）で言う「同時性」とどうかかわるかはもう少し説明を待たなければならないように思われる。

戸村（1991：224）には、以下の表が掲げられている。

修飾部と被修飾語の関係	修飾部の内容	「トイウ」の有無
同時的・直接的	具体的現象	無し
非同時的・間接的	抽象的概念	有り

表の左端の欄は、例（22）（23）についての説明で使用される。そして、中央の欄は、例（20）（21）の説明に必要なものであった。ここで、左端の欄と中央の欄との関係がどのようになっているのか、つまり「修飾部と被修飾語の関係が非同時的・間接的」であることと、「修飾部の内容が抽象的概念」であることの関係について、もう少し説明がないと、「抽出機能」と言われるものの内実がうまく理解できない。

例えば以下のような例で

（24）　彼は、不正を働いた事実を隠していた。
（25）　彼は、不正を働いたという事実を隠していた。

（24）と（25）を比較した場合に、あまり意味の違いを感じないという事実をどのように説明するかということも含めて、「という」の抽出機能につい

ては、もう少し詳しい説明が必要であるように思われる。

3-2-5　戸村（1991）から見えること

上に述べた通り、戸村（1991）の、「という」には抽出機能があるという主張の妥当性については、「抽出機能」と呼ばれているものの内実がはっきり述べられていないため、ここでは保留としておきたいが、以下の 2 点は、今後の考察の参考となるのではないかと思われる。

一つは、戸村（1991）が退けた「非叙述性」と、戸村（1991）が主張する「という」の抽出機能との間に、平行性が認められるのではないかという点である。

一見、「という」は「非叙述性」を持つという主張と、「抽出機能」を持つという代案とは全く異なるように見えるが、この 2 つを「引用」という補助線を用いて比較してみると、そこには平行性が見て取れるように思われる。

「という」は引用の助詞「と」と同じく、いったん文として成立したものをそのまま他の文に引き入れる機能を有していると考えれば、場合によっては、「非叙述」的な修飾部を導くことができるようになるということが言えそうである。つまり、引用という形をとることによって、ある文の真偽については保留としたまま、その文を別の文の連体修飾部に引き入れることができるようになるということだ。

一方、戸村（1991）が「という」には抽出機能があるとする根拠となったのは、以下の例であった。

（26）　佐藤さんがアメリカへ行った（ϕ ／ ?* という）話を聞きましたが、なかなかおもしろい話でしたよ。（再掲）

（27）　佐藤さんがアメリカへ行った（*ϕ ／という）話を聞きましたが、それは本当ですか。（再掲）

この（27）の例について、戸村（1991）が主張するように、本当かどうかが

問われているのは「佐藤さんがアメリカへ行った」ということのみであると考えるとしても、この事実の説明としては、「という」が修飾部が表わす事態を関連する出来事から切り離す機能を有するからだという説明以外にも説明の可能性は開かれているように思われる。

ここで詳しく論じるだけの用意があるわけではないのだが、例えば、寺村（1975–1978）が言うように、「という」が他の文を引用という形でそのまま連体修飾部に引き入れるための形式であると考えてみると、多くの出来事の中から「斉藤さんがアメリカへ行った」という事態だけが問題とされるようになるメカニズムが説明できるようにはならないだろうか。

もう 1 点、述べておきたい。先の（22）（23）の例において、筆者の直感によれば、修飾部と感覚の名詞との同時性（とされるもの）と、内の関係の修飾部と底の名詞との同時性（とされるもの）との間には、確かに類似を感じる。戸村（1991）では、同時性と呼ぶ性質が「という」の介在の可否とかかわるものとして強く主張されているが、（筆者の直感に過ぎないが）戸村が同時性と呼ぶ性質はむしろ、感覚の名詞の内容補充の連体修飾と、内の関係の連体修飾の近接性を説明するものなのではないか。

何度も言うように、寺村（1975–1978）では、「という」を扱うに当たって、「という」には引用の「と」が含まれるという点が重視されている。このことと、戸村（1990–1992）で主張されていることを合わせて考えたとき、やはり「という」という形式が引用の「と」の性質を色濃く受け継いでいるという観点は、「という」の使用条件の整理に当たってかなり有効であるということが示唆されているのではないか。

3–3　大島資生（1989, 1991）

最後に、大島資生（1989, 1991）を検討したい。これら 2 つの論文は、のちに連体修飾全体について論じたもの（大島資生 2010）の各論の一部になったが、大島（1989, 1991）は連体修飾の中でも特に内容補充の連体修飾

に注目したものである。

大島のこの 2 つの論文は、寺村（1975–1978）と極めて近いテーマを扱っていながら、寺村論文とは離れた形で考察が進められているため、寺村論文との関係が見えにくい。

そこで、ここでは、先の寺村（1975–1978）と比較して整理しなおしてみることにしたい。寺村（1975–1978）では、以下の 3 点が主張されていたが、これらとの関連で大島（1989, 1991）をまとめてみる。

①修飾部の陳述度の高さが「という」の介在の可否と関連する。
②底の名詞の種類が「という」の介在の可否と関連する。
③底の名詞が主節内でどのような位置に置かれるかで、「という」の介在の可否が変わってくる可能性がある。

3–3–1　大島（1989）

まず大島（1989）は上記①と関係づけることができる。この論文は、底の名詞が持つ意味（構造）によって修飾部の陳述度が決まってくるという点について整理したものだからである。例えば、以下の例を参照されたい。

（28）　公金が闘争資金に流用された（という）事実
（29）　* おそらく太郎は麻薬密売人と接触しただろうという事実
（30）　？？引き返すという命令
（31）　引き返せという命令

上（28）（29）において、「流用された」といういわゆる確言形式が許され、「（おそらく）接触しただろう」という推量形式が許されないのは底の名詞「事実」が持つ意味に関係がある（つまり、「事実」という名詞は、内容補充の修飾部として陳述度の低い節を要求する）。また、（30）において、「引き返す」という形式が許されないのも「命令」という名詞が内容補充の修飾部として命令の形式を要求するからであると考えられる。

つまり、大島（1989）では、寺村（1975–1978）が陳述度の高さによって「という」の必要度が変わるとしていた点をもっと進めて、内容補充の修

飾部を取りうる名詞が、その修飾部内にどのような文末形式を要求するかについてまとめたということである。

3-3-2　大島（1991）

次に、大島（1991）は、内容補充の連体修飾に「という」が使用される条件について考察したものである。大島（1991）の結論は次のようである。

> 「条件（1）
> 修飾節が言語による「表現」行為を経ていることが含意される場合、「という」が必須になる。」（大島 2010：162）

> 「条件（2）
> 「という」が任意である構造において、修飾節の表現形式－すなわち当該の「事態」を修飾節の形で「表現してみるとどうなるか」－を話し手が意識している場合、「という」が介在する。」（大島 2010：162）

上記の「条件（1）」は寺村論文では、②に挙げた通り、底の名詞の種類として分類されていて、寺村論文が「発話の名詞が底の名詞の場合には内容補充の修飾部には「という」が必須になる」と主張したことに対応する。

これらの主張も、先の寺村（1975-1978）の②との比較で考えると理解しやすいように思う。

つまり、寺村（1975-1978）が、底の名詞の種類を書き上げることによって「という」の介在の可否を論じたのに対して、大島（1991）では、底の名詞による分類ではなく、底の名詞や修飾部が持っている意味（の素性）によって「という」介在の可否が決まるというように分析した。このような分析は、「という」があってもなくても許される例について、「という」がついている場合とついていない場合とで意味の違いを認めるということでもあり、それゆえ「条件（2）」が示される。

また、「という」が必要であるかどうかが底の名詞の種類ではなく、底の名詞や修飾部の意味素性によって決まるという主張は、寺村の主張②を③と平行的に考えるという方向を決定づける。

ここでは、「という」をつけてもつけなくても使える場合について、そこに生じる意味の違いを説明した例を一つだけ引用しておきたい。

（32）　それをやめれば不幸が起こるかもしれない（という）不安（大島 2010：153）

「「という」が介在しない b.【引用者注：上記（32）で「という」が用いられない場合】では「不幸が起こるかもしれない」ことをこの文の話し手も認めているとの解釈が可能だが、介在する a.【引用者注：上記（32）で「という」が用いられた場合】では必ずしも認めていない（「不安」を感じる人がそう思い込んでいるだけなのかもしれない）という解釈のほうが強い。」（大島 2010：153）

例（32）に「という」を用いた場合と用いない場合との間に、引用のような意味の違いが生じることについて、大島（1991）の「条件（2）」に沿って説明すれば、おそらく次のようになるだろう。

例（32）で、「という」が介在する場合には、「不安」を「表現してみるとどうなるか」に注目していると言える。「不安」を表現できるのはその「不安」を経験している人だけなので、経験者の視点から見た表現であると解釈されるということになる。

3-3-3　大島（1989, 1991）から見えること

大島（1989, 1991）で主張されていることは寺村（1975-1978）に極めて近い。しかし、以下のような点で大きく異なっている。

（1）　考察に際して一旦は、修飾部の陳述度と底の名詞の種類という 2 つの外形的な基準で分類するが、その 2 つだけでは、「という」の使用条件は記述できないことを指摘する。

（2）　上記の外形的な基準の他に、底の名詞が主節の中でどのような文脈に置かれるかが、「という」介在の可否に影響を与えるということに注目し、その条件を記述しようと試みる。

（3）　大島は、底の名詞が主節内において、言語的な表現を意識する文脈におかれると「という」が使用されるようになるという方向で考察を進めているが、このような「という」の特徴は、「という」が引用の「と」を含んでいることと深くかかわるということが予測される。

このうち、特に（2）は寺村（1975−1978）から大きく進んだ点である。

4. おわりに

補文標識「という」について考察するために、その手掛かりとして、本稿では、同じテーマを扱う 3 つの先行研究を詳細に検討した。そこから分かることは以下の通りである。

（1） 寺村秀夫（1975−1978）では、修飾部の陳述度、および、底の名詞の種類、という 2 つの外形的な基準から「という」が介在する条件について検討しているが、「という」の介在の可否に関しては、これらの外形的な基準の他にも考慮しなければならない点がある。

（2） 「という」の介在の可否を左右する条件の考察に当たっては、修飾部の陳述度、底の名詞の種類という外形的な基準をも包括する、意味的・構文的な条件を書き上げる方向を模索するのがよい。

（3） 「という」の介在の可否を左右する条件は、おそらく「という」という形式が含む引用の助詞「と」の性質を考慮して書き上げるべきものであることが予想される。

今後の考察に当たっては、やはり、寺村（1975−1978）および大島（1991）と同様に、まずは底の名詞を限定し、構文的な条件によって「という」の介在の可否がどのように変化するかを検討することが大切であろうが、そこには、引用形式としての性質がどのように反映されているかという観点が欠かせない。

本稿で述べたことは、まだ「という」に関する研究のほんの入り口にすぎないが、先行研究の検討から今後の方向性を探るということを一区切りとし、この先の検討は今後の課題としたい。

注

1） 本論文で扱うのは、「N という N」の「という」ではなく、「Clause という N」の「という」である。補文標識という用語は戸村佳代（1990）から借りた用語だが、この用語は「clause という N」という構造で現れる「という」を指すものとする。補文標識「という」には、以下のような「という」は含まない

ものとする。

・彼は、1000 年前に失われたという黄金のマスクを発見したと主張している。

この例では、「という」は「黄金のマスクが 1000 年前に失われた」ということが伝聞であるということを示している。このような例については、今回の考察対象から外すこととする。

2）寺村秀夫は、1975 年から 1978 年の 4 回に渡って、「連体修飾のシンタクスと意味」というタイトルの論文を大阪外国語大学留学生別科編『日本語・日本文化』に掲載した。これらの論文はのちに、『寺村秀夫論文集 I　日本語文法編』（くろしお出版 1993）にまとめられている。本論文での引用は寺村（1993）を使用している。

3）大島資生（1991）によると、戸村佳代は補文標識「という」に関する修士論文を執筆しており（1985 年筑波大学大学院地域研究科）、大島（1991）の引用を見る限り、その主張はここで引用する戸村（1990-1992）とほぼ同様であるようである。そのため、本稿でも大島（1991）の検討に先立ち、戸村（1990-1992）を検討することにした。

4）例文は 2 つとも戸村（1991）より引用。

参考文献

大島資生（1989）「「命題補充の連体修飾構造」について」『日本語研究』11 東京都立大学人文学部国語学研究室 pp. 61-77

大島資生（1991）「連体修飾構造に現れる「という」の機能について」『人文学報』225 東京都立大学人文学部 pp. 27-58

大島資生（2010）『日本語修飾部構造の研究』ひつじ書房

寺村秀夫（1975, 1977.3, 1977.9, 1978）「連体修飾のシンタクスと意味（1）～（4）」『日本語・日本文化』4～7 大阪外国語大学留学生別科

寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集 I―日本語文法編―』くろしお出版

戸村佳代（1990）「名詞修飾における『トイウ』の機能（1）―統語的位置付け―」『明治大学教養論集』232　pp. 443-452

戸村佳代（1991）「名詞修飾における『トイウ』の機能（2）―‘トイウ’の意味的機能―」『明治大学教養論集』242　pp. 215-231

戸村佳代（1992）「「トイウ」再考」『明治大学教養論集』251　pp. 189-199

Josephs, Lewis（1976）*Some Aspects of Complementation in Japanese: A Study of ‘to yuu’*. Ph.D. dissertation, University of Wisconsin-Madison.

Nakau, Minoru（1973）*Sentential Complementation in Japanese*. Kaitakusha